ISSN　1344―8366

『古代アメリカ』　*América Antigua*

第 22 号，2019 年，抜刷（pp.45-58）

＜調査研究速報　特集＞

酒と水と嵐の神の壺

― 形成期終末期トラランカレカにおける都市の発展と社会統合―

村上達也（テュレーン大学）
福原弘識（埼玉大学）、
ディエゴ・マタダマス・ゴモラ（テュレーン大学）、
嘉幡茂（京都外国語大学）

El pulque, el agua y la vasija de los Dioses: el desarrollo urbano y la integración social en el Formativo terminal de Tlalancaleca

Tatsuya Murakami (Tulane University)
Hironori Fukuhara (Saitama University)
Diego Matadamas Gomora (Tulane University)
Shigeru Kabata (Kyoto University of Foreign Studies)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』22, 2019, pp.45-58

＜調査研究速報 特集＞

酒と水と嵐の神の壺

―形成期終末期トラランカレカにおける都市の発展と社会統合―

村上達也（テュレーン大学）
福原弘識（埼玉大学）
ディエゴ・マタダマス・ゴモラ（テュレーン大学）
嘉幡茂（京都外国語大学）

１．はじめに

メキシコ中央高原の形成期終末期（前100～後250年）は、古い時期からの都市伝統を持つトラランカレカやクィクィルコと、新たに造られ後の時代まで継続するテオティワカンやチョルーラが混在する過渡期であった［嘉幡・村上 2015；嘉幡他 2014；Murakami et al. 2017a］。大規模な都市の形成過程の中で、甚大な自然災害にも見舞われ［Plunket and Uruñuela 1998, 2005, 2006］、避難民が溢れかえる混沌とした時期でもあった。この社会変動において、トラランカレカでは巨大なモニュメント建造物の建設が盛んとなり、多くの住民が公共事業に参加することで社会全体の統合化が図られていった（本速報では「大規模統合システム」と呼ぶ。本号所収の嘉幡他 2019参照）。しかし、筆者らは社会統合のメカニズムはより複雑であったと考えている。都市全体の統合は、中位レベルにおける社会の統合システムを発展させることで可能となり、多様な社会集団が都市共同体に組み込まれていったと推測する。ここで言う「中位レベルにおける社会」とは、都市全体と世帯の間に位置する中規模の社会集団を指し、複数の世帯から構成される近隣住区（neighborhood）や中間エリート層（intermediate elite）、異なる職能集団などその性質は様々であったと考えられる［Arnauld et al. 2012; Smith 2010］。本調査では中規模社会集団の成員を特定する充分なデータが得られていないため、個別の世帯や親族などの小規模集団を超えた規模で、都市の一部の住民を統合するシステムを広く「中規模統合システム」と呼ぶ。

筆者らが行ったいくつかの中規模の祭祀施設の発掘調査から、これらの祭祀施設の一部を構成する広場は400～900m^{2}ほどの広さであることが判明した。広場の大きさがそこで行われた活動の規模（動員人数）と相関すると仮定すると［Inomata 2006; Murakami 2014; Tsukamoto and Inomata 2014］、おそらく数百人の都市住民がこれらの広場で行われた活動に参加したと考えられる。これらの広場は、ほぼ全ての都市住民（おそらく2万人前後）を収容可能であった大広場（40,000 m^{2}前後; 本号所収の青山他 2019図5参照）と比べると明らかに小さく、また個別の世帯や親族集団にとっては大きすぎることから、中位レベルの社会的活動が行われていたと筆者らは考えている。さらに、発掘された遺物の分析から、これらの中規模祭祀施設では雨や豊穣に関わる饗宴が繰り返し実施されていたことが判明した。都市全体の統合のシンボルであった水に纏わるイデオロギーが、中規模の社会統合の中核を成すことで、トラランカレカ社会に複数存在していた様々な性質の社会集団が包摂されてい

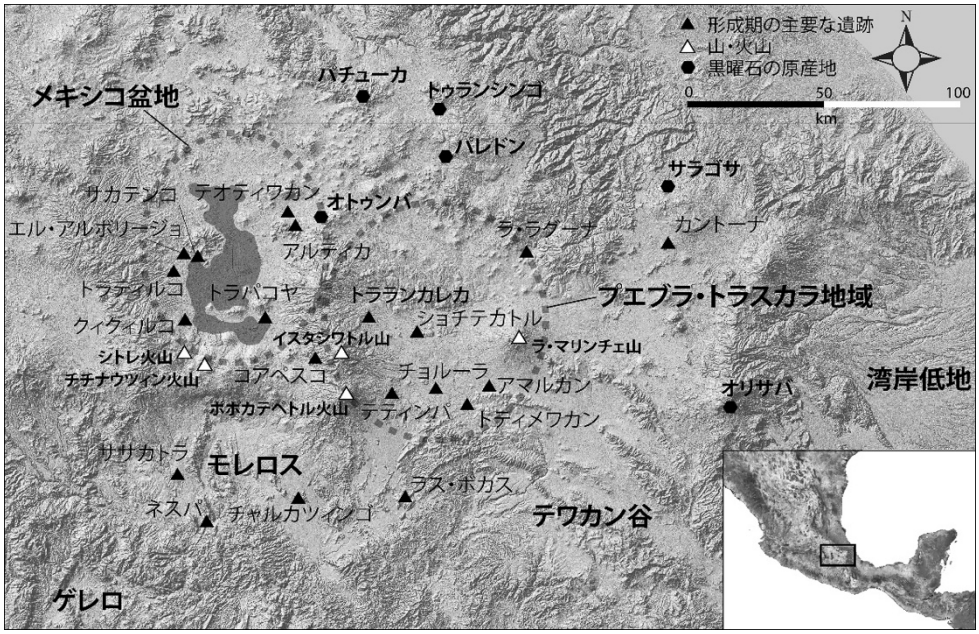

図１　メキシコ中央高原の主要な形成期の遺跡

ったのである。この結果、都市全体を統合するシステムが創り上げられたと考える。本速報では、（1）都市が拡大した過程を示すデータ、ならびに（2）中規模の儀礼実践を示すデータを基に、中規模統合システムについて議論する。

２．研究の背景：メキシコ中央高原における都市の形成

テオティワカン、トゥーラ、テノチティトランなど、メキシコ中央高原で発展した都市にはいくつもの共通した要素が見られ、「中央メキシコの都市伝統」と呼べるものが形成された［Drennan 1988; Sanders and Webster 1988］。計画性に富んだ人口密度の高い中央メキシコの都市伝統がいかにして確立されたのかは未だ不明な点が多いが、その起源は形成期中期まで遡ることが近年明らかになってきた［Plunket and Uruñuela 2005, 2012］。メキシコ盆地の編年ではティコマン期（前650～100年）の始めごろ、プエブラ・トラスカラ地域の編年ではテショロック期（前650～500年）に特定の地域に人々が集中し、第一世代の都市には、クィクィルコ、トララランカレカ、ショチテカトル、アマルカン、トティメワカンなどが含まれる（図1）［Carballo 2016; García Cook 1981; Lesure 2014］。これらの第一世代の都市はその後も発展を続け、形成期終末期（前100～後250年）の間に放棄されていった。その後、形成期終末期に形成されたテオティワカンとチョルーラが古典期中央メキシコの二大都市として発展する。

形成期中央メキシコの諸都市には、大きく3つの要素が共有されていた［Carballo 2016］。一つは、主要建造物が東西軸上に建てられたことである。次に、モニュメント建造物は水に纏わるシンボリズムと深く関係していた。そして最後に、火あるいは火山に関連した儀礼が世帯レベルで発展した（例えば、火の老神の香炉など）。これらの要素の内、二つ目の水に纏わるシンボリズムについては比較的よく理解されている。水のシンボリズムは建造物ならびに儀礼用アイテムとして物質化されていた。発掘されている例は少ないながら、主要建造物

の頂上部あるいはその隣接する場所に、石製あるいは土製の水を貯める鉢あるいは窪みがショチテカトル、トティメワカン、ラ・ラグーナなどで見つかっている。トティメワカンでは、石製の水溜場にカエルの姿が彫刻されている［Carballo 2016］。

儀礼用アイテムとしては、しばしば「トラロック」と呼ばれる嵐の神を象った壺あるいは象形土器が複数の遺跡から発掘されている［Carballo 2016］。嵐の神は火の老神と並んで、中央メキシコで約 2000 年の間ほぼ形を変えずに崇拝された神で、テオティワカンの主要ピラミッドやテノチティトランのテンプロ・マヨールの埋納遺構から多数の嵐の神の壺が発掘されている［Rattray 2001］。

形成期中央メキシコの諸都市では、水を貯めることのできる施設を伴った主要建造物で、嵐の神の壺を使い雨や豊穣を祈る儀礼が行われていた可能性が高い。こうして、水と関連した儀礼施設の建設、水と関連した儀礼用具の製作、そして、水と関連した儀礼実践そのものが、形成期の都市住民を統合するメカニズムの一つとして発展し、テオティワカンを含む後の時代の都市へと受け継がれていった［Carballo 2016］。後古典期では都市のことをアルテペトル（*Altepetl*）、ナワトル語で「水の山」と呼ばれたが、それは形成期において人工的な水の山（ピラミッド）が都市を組織する中心的な役割を果たしたことに起因することは想像に難くない［嘉幡他 2017］。

３．トララランカレカにおける都市の発展

トララランカレカ遺跡（本号所収の青山他 2019 図 5 参照）はプエブラ・トラスカラ地域の西端に位置し、メキシコ盆地とプエブラ・トラスカラ地域を繋ぐ交通の要衝だった（図 1）。筆者らの過去 7 シーズンに渡る調査により、定住村落の確立（前 800 年頃）から都市の放棄（後 250 年）までの約 1000 年に渡る大まかな社会変化の過程が明らかになっている［嘉幡他 2014、2017；嘉幡・村上 2015；Murakami and Kabata 2019; Murakami et al. 2017a, 2018a］。中でも特筆すべきは、形成期終末期（前 100～後 250 年）になってからモニュメント建設が加速し、都市も拡大したことである。従来の解釈では、後 70 年前後に起こったポポカテペトル火山の大噴火の影響で形成期の社会秩序が崩壊し、テオティワカンが勃興する下地となったとされていたが、もはやこの解釈は過去のものとなった。トララランカレカでは後 70 年以降も大規模建造物が更新され巨大化していったことが発掘調査から確認されている。さらに、表面採集、手動アースオーガーによるボーリング調査、ならびに発掘調査の結果からは、都市の居住域が形成期終末期に大きく拡大したことが示唆されている。以下では、形成期終末期に都市が拡大したと思われる北地区で行われたボーリング調査ならびに発掘調査の概要を報告する。

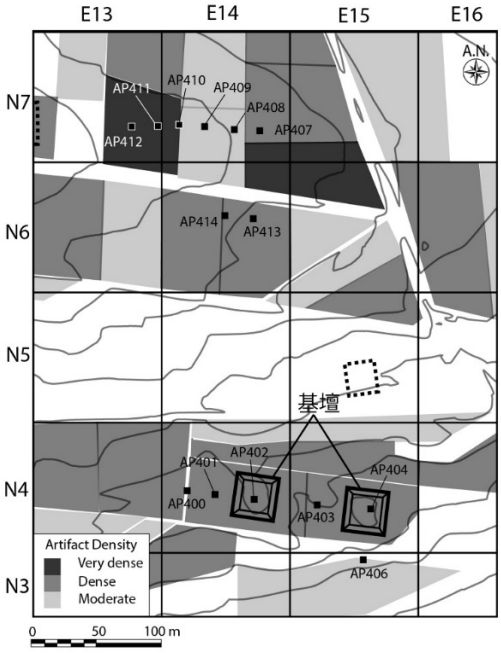

図 2　北地区における遺物の散布率（表面採集による）とボーリング調査地点（AP 番号）

3-1. ボーリング調査

北地区の北側では、表面採集調査からテオティワカンのパトラチケ期（前 100～紀元元年）・ツァクアリ期（紀元元年～後 150 年）の土器に酷似した土器片が多数観察された一方で、それ以前の土器片が極端に少ないことが判明した。この解釈を補うために手動アースオーガーで直径 10cm ほどの穴を開け、土層ならびにその含有物を観察した。さらに、約 50cm おき、あるいは層位が変わるごとに土壌サンプルを採取し、ICP-MS（Inductively Coupled-Plasma Mass Spectrometry）を使い地化学分析を行った（方法についての詳細は Murakami et al. 2018a を参照）。北地区の北側に 8 つ、南側に 6 つ、計 14 のボーリングを行った（図 2）。以下では、一番北側に開けた６つのボーリング（AP407-412）について報告する。

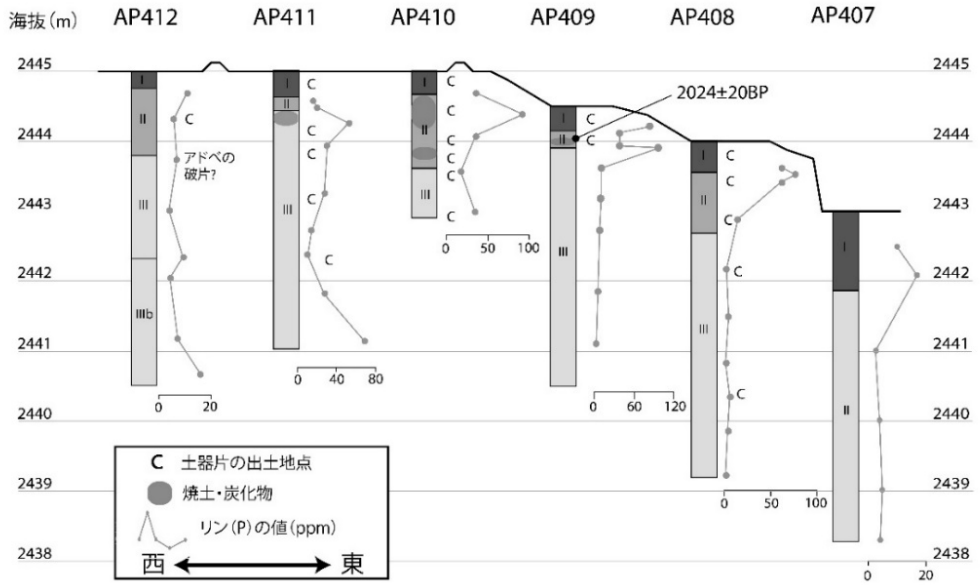

図 3　ボーリング調査により復元した土層断面の模式図とリンの測定値（ボーリング地点は 20m おき。層の番号はボーリング地点ごとに付けられたため、異なるボーリング間で必ずしも対応していない。マンセル土色帖に基づいて類似した層を同じ色調で示した）

調査結果から、遺物はほぼ第一層、二層に限られており、地表から 1 メートルほどで無遺物層に行き着いた。この無遺物層と同じ土層から土器片が回収された例もあったが、ボーリング中に上層から落ちた可能性もある。この解釈は化学分析からも支持されており、人的行為を示す元素（とくにリン）は地表から 1 メートルほどに限られていた（AP413-414 でも同じパターンが観察された）。また、表層下から焼けた土や炭化物が回収されたが、AP409 の第二層の炭化物を年代測定したところ、前 50 年から紀元元年の間の年代（2024±20BP）が得られた（図３）。表面採集で得られた土器データとも合致し、この地区は主に形成期終末期に居住域として機能していたとする解釈を補完する。さらに、形成期終末期の居住レベルの下には無遺物層が広がっていると共に、人為的活動を示す地化学データも得られなかったことから、少なくともボーリングを行った区域では形成期終末期以前の居住はなかった可能性が高い。つまり、形成期終末期になり、トラランカレカの都市居住域が北に広がっていったと考えられる。

3-2. 北地区における発掘調査

表面採集ならびにボーリング調査を基にした解釈を検証し、さらに形成期終末期の居住形態の諸相を明らかにするため発掘調査を行った。南北 70m、東西 52m の範囲でトレンチ発掘を実施し（図 4）、三期の人為的活動を確認した。一期目としては炭化物を含む土器片や石が詰まった直径約 1.8m の土抗 1 と土抗 2、二期目は大基壇の建設、三期目は基壇の拡張をそれぞれ確認した（図 5）。放射性炭素年代測定によれば一期目の土抗の設置が前 158-114 年、二期目の基壇建設は後 125 年頃という結果が得られた。基壇床面直下は土抗 1 と土抗 2 を除き、表面採集ならびにボーリング調査によって想定された通り遺物が極端に少ない層になるため、本調査区における人為的活動は形成期終末期に集中していたと考えられる。

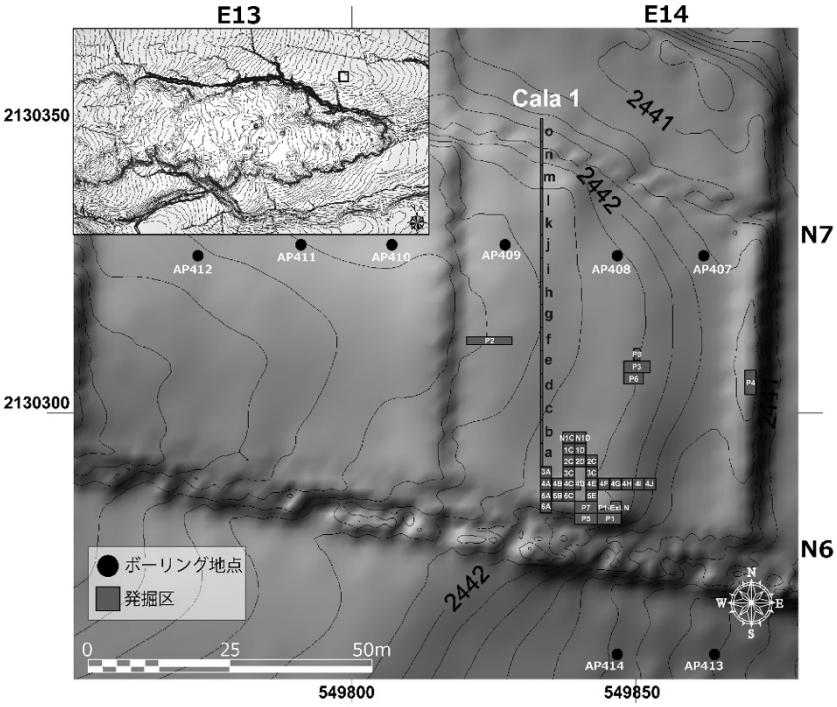

図 4　北地区の位置およびボーリング地点と発掘区

発掘調査は住居址の検出を想定したものであったが、その存在を示す直接的な証拠は得られず、建築物として確認されたのは①基壇の東端にあたる段差約 30cm のタル一壁（傾斜壁）、②基壇の東側に付加された約 5m のスロープ、③2 つの石壁（壁 1 と壁 2）であった。これらのうち、2 つの石壁は住居址の一部である可能性が否定できないものの、直径 20cm 程度の石が一列に並ぶだけの壁であり、三期目のスロープ設置用の補強壁とも考えられ、住居址の一部と解釈するためには資料が不足している。基壇上では基壇床面によって封された土抗 1 と土抗 2 を含む数点の土抗、及び基壇床面を切り込んで作られた、大量の土器片が詰まったゴミ捨て場（直径 2.6m）が検出されたものの、前述の通り住居址の存在を直接裏付ける石壁などは検出されなかった。

発掘調査の結果明らかになったのは、形成期終末期の後 125 年頃に北地区に大基壇が建設されたことである。この基壇は、東に 9 度傾斜した南北軸を持ち、発掘調査で確認できる規模は少なくとも南北辺 67m、東西辺 30m に及ぶことが判明した。ボーリング調査結果を基に考えると、本基壇は発掘調査区西側へまだ続いているとみ

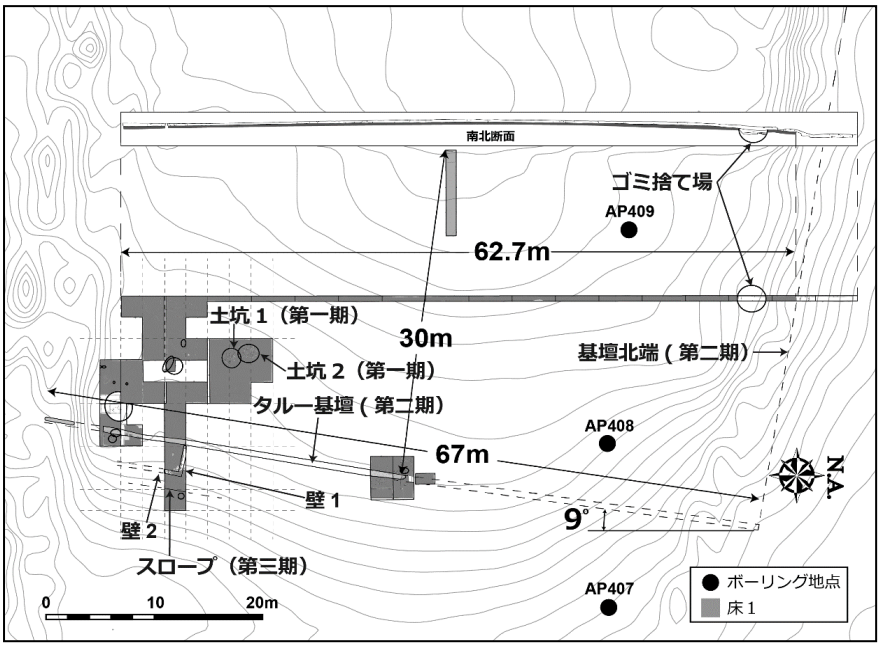

図 5　北地区における遺構検出状況

られる。また調査区南側は道路および耕作地として開墾・掘削されているため基壇の南側は失われているが、基壇建設当初は南側へも更に伸びていたことが想定できる。基壇の上下では土製の床が確認され、建築物のない広大な広場のような解放空間であったと考えられる。出土遺物の分析をまだ行っていないため詳細は不明だが、調査区北側で検出されたゴミ捨て場における大量の土器片の分析によって、北地区の住人たちが基壇周辺部において行った活動の一端が明らかにできるだろう。

４．中規模の祭祀施設ならびに儀礼実践

形成期終末期における都市の拡大とモニュメント建造物の更新の加速化と並行して、中規模の祭祀施設も新たに建設され更新されていった。本速報では、二つの地区で行った発掘調査の概略を説明し、出土遺物の予備的に行った分析について報告する。

4-1. 建造物 C5－C6 における活動の痕跡

二つの大建造物（建造物 C1 と C2 ）を中心に据えた建築複合 C（図 6）は、舌状台地の東端から約 600m 西に位置する。試掘調査から、建造物 C2 のすぐ南に中規模の祭祀施設が見つかった。西面に中央階段がある約 20m 四方の低い基壇（建造物 C5）と、その 14 m 程西側に南北に約 30m、東西は不明だがおそらく方形の基壇（建造物 C6）が発見された。建造物 C6 に中央階段はなく、その代わりに 10m 幅のステージ上の前庭部があり、その前庭部の両側に階段が作られたと考えられる（図 7）。建造物 C5 と C6 の間は開かれた空間、おそらく広場となっているが、祭壇のようなものは少なくとも東西の軸上には建てられなかった。

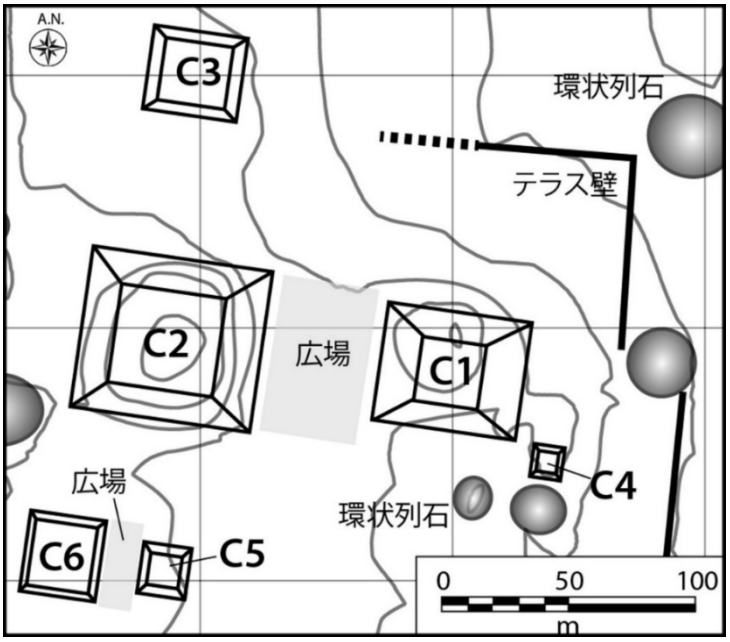

図6　建築複合Cの主要建造物

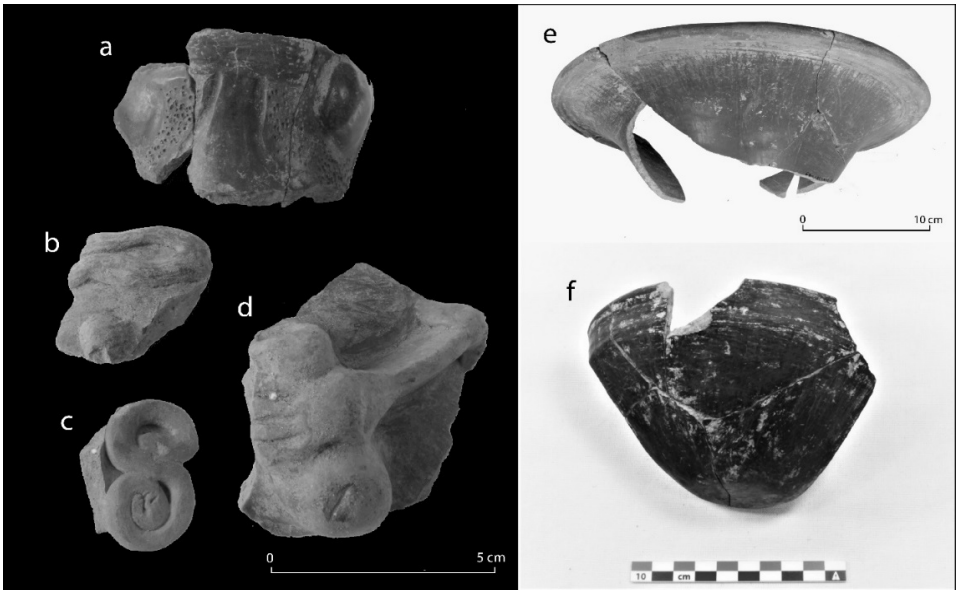

写真1　建造物C5-C6複合出土の土器。a-d: 嵐の神の壺（a = 両目と鼻；b = 眉と目；c = S字の耳；d = 壺を持った左手）；e: 大型の壺の口縁部；f: コップ）

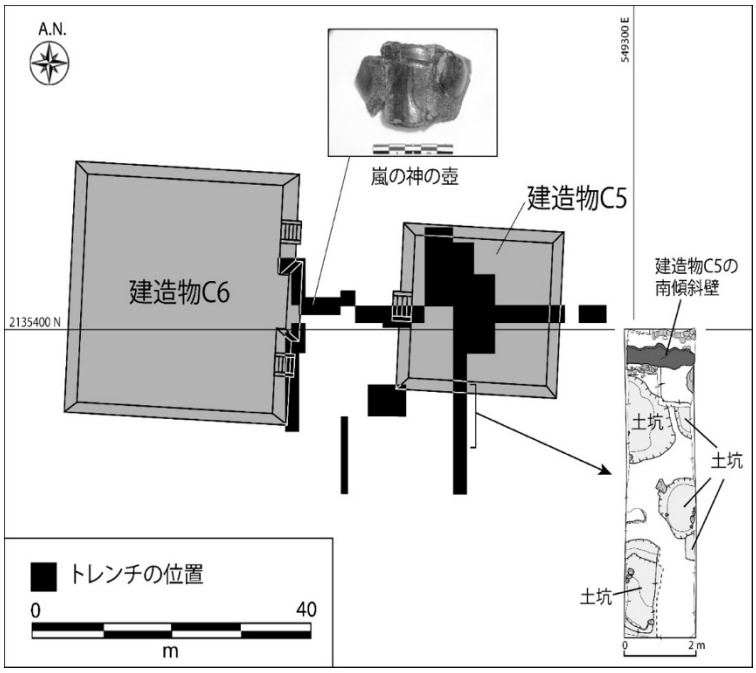

図７　建造物 C5－C6 の復元図とトレンチの位置（嵐の神の壺の出土地点ならびに建造物 C5 南側の土坑の平面図も併記）

層位的発掘の結果、建造物 C5 は三期に渡って建て替えられており、最初の二期は形成期後期に、三期目が形成期終末期に属する。最後の三期目の建設に伴い前の時期の遺構が大きく破壊されているため、前の時期の活動の痕跡はほとんど検出されていない。建造物 C6 も C5 と同じペースで建て替えられたと考えられるが、C5 の二期目に対応する基壇の内部を発掘することができなかったため、一期目に関しては現時点で不明である。

放射性炭素年代測定の結果、建造物 C5 の一期目が前 360～390 年、二期目が前 280～230 年、三期目がおそらく紀元元年頃に建てられ、後 150 年頃に一度改修された［Murakami and Kabata 2019; Murakami et al. 2017b, 2018b］。

両基壇の頂上部は長年に渡る破壊・浸食により全く残っていないため、両建造物がどのように使われていたのか検証するのは困難である。しかしながら、両基壇間の広場や周辺部では最終時期の生活面が残っており、ゴミ捨て場などの遺構を検出することができた。建造物 C5 の南側のトレンチ発掘から、三期目前半（改修前）に作られたゴミ捨て場が複数見つかった（図７）。これらのゴミ捨て場は円形・楕円形の土坑から成っており、複雑な切り合い関係にあることが判明した。出土遺物の分析はまだ途中であるが、いくつか興味深い発見があった。

まず、これらのゴミ捨て場では、動物骨がほとんど出土しなかった。土器の器種は多岐に渡っているが、液体の貯蔵に適した大型の壺（テオティワカンでアンフォラと呼ばれている器形）やコップ、香炉なども含まれる（写真 1）。口縁部の分析（n＝242）による大まかな器種の分類では、壺類（小型・大型を含む）が約 33％（n＝79）、ボウル類が約 63％（n＝152）、皿が 3％（n＝7）で、圧倒的に食事を盛り付ける食器類が多かった。壺類では 3 割程度が口縁部の直径 10 cm 未満の小型の壺で食事用である可能性があるほか、大部分は貯蔵用と思われるものであった。壺類、ボウル類含め、調理用と考えられる土器はごく少数であったと言える。土器の組成

からは、ゴミ捨て場はおそらく日常の調理・食事に伴うものではなく饗宴のためのもので、饗宴内における調理はかなり限られていた可能性が高い。また、香炉が使われていた可能性が高いことから、儀礼に伴う饗宴であっただろう。ただし、同時代・同地域の比較資料が少なく［Carballo 2011］、他の解釈の可能性もあることを明記しておきたい（例えば、神官集団などの職能集団の日常生活に関係したもの）。動物骨の欠如が何を意味するのかは現段階では不明であるが、調理された肉料理には骨が除いてあった、肉料理は消費されなかったなどの可能性がある。

ゴミ捨て場とは異なるコンテクストから興味深い遺物が見つかった。嵐の神の壺である（トラロックの壺と呼ばれることもある）（写真 1）。残念ながらオリジナルのコンテクストは不明であるが、建造物 C6 の前庭部の崩落層から出土しており（図 7）、もともと建物内に設置された埋納遺構の一部か、あるいは前庭部に置かれていた可能性もある。想像の域は出ないが、前述の饗宴は嵐の神に関連する儀礼の一部として行われていたのかもしれない。

4-2. トレス・マリーアス建築複合における活動の痕跡

トレス・マリーアス建築複合は建築複合 C のすぐ東に位置し、4 基の基壇（建造物 TM1-4）が西側に一列に並び、オープンスペースを挟んでその東側に一基の基壇（建造物 TM5）が建っている（図 8）。踏査の時点ではこのオープンスペースは大広場であったと考えられたが、試掘調査から各基壇に対応する中規模の広場が存在することが示唆された［Murakami et al. 2017b］。以下では、トレンチ発掘を行った建造物 TM5 とその西側の広場について報告する。

建造物 TM5 はタルー・タブレロ様式の基壇で、内部に一基古い基壇が見つかった（建造物 TM5-Sub1）。建造物 TM5-Sub1 は後 100 年頃に建てられ、直後に二度床が張り替えられている。その後、おそらく後 200 年前後に更新され、建造物 TM5 が建てられた。このタルー・タブレロ基壇の西側には推定 30 m 四方の広場があり、その北には環状列石（地表で確認）、南には別の建造物が建っていた可能性が高い。試掘調査から崩落した建築材（モルタル、切石など）が広場と同レベルの床面直上から検出されており、おそらく北側の環状列石と対になる建造物が広場の南側に造られたと考えられる（図 8）。後述するように、この床面から浅い土坑が検出され、儀礼に使われたと思われる遺物が出土した。

建造物 TM5 と広場の複合の南には建造物 TM2 とそれに伴う広場や関連施設があったと考えられる。トレンチ発掘により、広場の東端に U 字型の低い基壇が検出されたが、おそらく形成期後期に属するもので、形成期終末期にどのように改変されたのかは不明である。この基壇の立ち上がりが地表面直下から検出されており、それ以降の遺構は破壊・浸食されたと考えられる。

前述した土坑からは、建造物 C5 に伴うゴミ捨て場同様、動物骨が出土しなかった。土器の器種も、皿やボウルなどの食事を盛り付けるものやコップが多数を占める。そして、香炉や土偶、嵐の神の壺などの儀礼に伴う遺物も出土している（写真 2）。さらに興味深いのが、完形品一つを始め計 184 の盃あるいはミニチュアの浅鉢の口縁部が出土した。これらのデータは、その内実は異なるものの、建造物 C5-C6 のものと類似点が多く、儀礼に伴う饗宴の廃棄物である可能性が高い。トレス・マリーアス建築複合の土坑は、共伴した炭化物の年代測定からおそらく後 210-250 年に位置づけられる（テオティワカンのミカオトリ期に相当）。つまり、建造物 TM5 と同時代で、都市が放棄される直前であり、建造物 C5 のゴミ捨て場よりは時期的に後である。

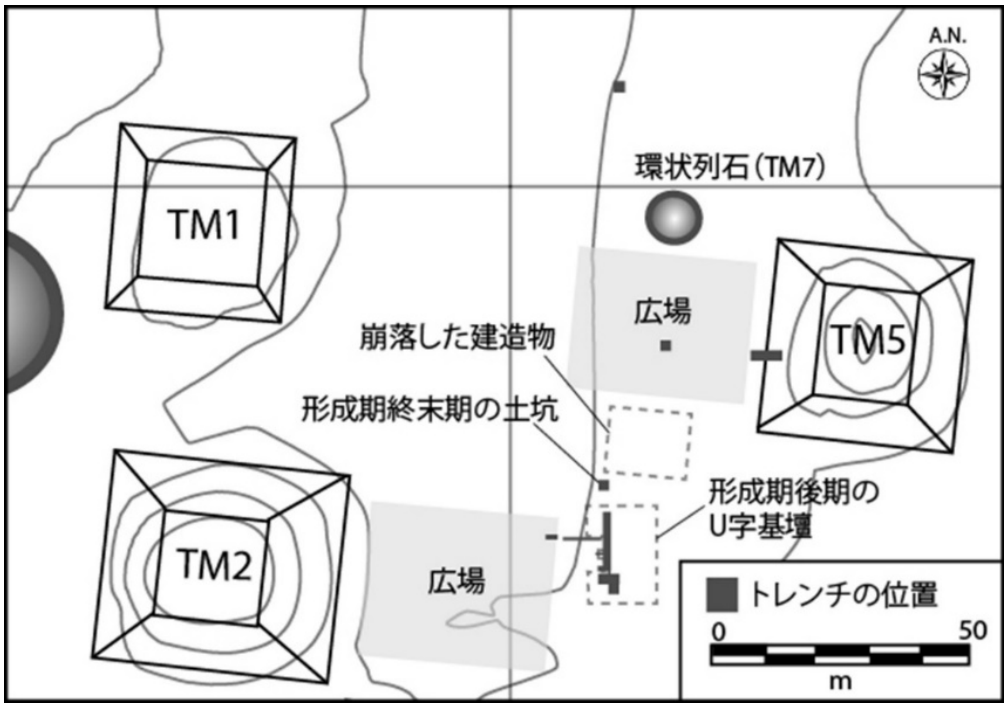

図8　トレス・マリーアス建築複合の主要建造物（北半分）とトレンチの位置

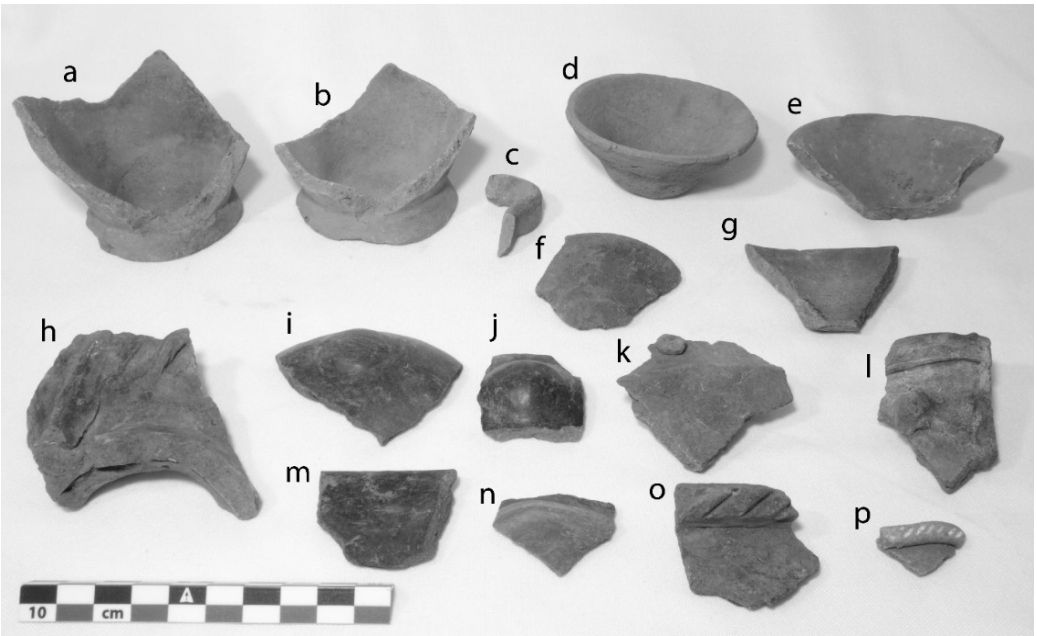

写真2　トレス・マリーアス建築複合の土坑から出土した土器。a–c：コパ式土器（コップ）；d–g：ミニチュアの浅鉢（盃）；h–j，n：嵐の神の壺；m：浅鉢；k，l，o，p：香炉

4-3. 嵐の神とプルケ

嵐の神（あるいはトラロック）に関係した儀礼は数多く存在したと考えられるが、興味深いアナロジーがアステカ（後古典期後期）の儀礼実践との間に存在する。本稿で提示したデータから結論づけることは時期尚早ではあるが、アステカの儀礼実践から類推すると、嵐の神の形のみならず、その意味や関連する儀礼の原型は約2000年ほど遡る可能性がある。

スペインのフランシスコ会修道士サアグン［Sahagún 1997a[1590], 1997b[1590]］の記録によると、後古典期のメキシコ盆地ではプルケが様々な儀礼や祭祀で消費されていたが、プルケの神のための饗宴は、雨の神・山の神のものと同じ月に開催され、「アテモストリ（*Atemoztli*）」と呼ばれる饗宴が最も重要であった［Sahagún 1997a[1590]:252v］。このアテモストリでは、トラロックが更新され空から降りてくるとされたため、山の頂上で神に対する負債を支払ったと説明されている。また、プルケを飲むための「オクテコマトル（*Octecomatl*）」と呼ばれる粗製のミニチュア土器（高さ10 cm以下）は、儀礼においてのみ使用された［Sahagún 1997a[1590]:74r］。サアグンの他の記述によると、8年毎に雨の神を称えて行われていた「アタマルカワリストリ（*Atamalcaualiztli*）」と呼ばれる饗宴では、七日間のあいだ断食を行い、「水のタマル」と呼ばれるトウガラシも塩も肉も入っていないタマルが食された［Sahagún 1997a[1590]:253v］。

これらの記述から読み取れるのは、雨の神（嵐の神）と饗宴、プルケ、そして肉の欠如の密接な関係、ならびにプルケとミニチュア土器の関係である。これらの内、肉の欠如については他の様々な解釈も可能であり、妥当な仮説を得ることは現時点では難しい。しかし、遺物の出土コンテクストならびに共伴関係を考慮すると、トラランカレカのデータから得られるのは、嵐の神と関係した饗宴がトレス・マリーアス建築複合ならびに建造物C5-C6 複合という中規模の祭祀施設において行われ、そこではおそらくプルケが消費されただろうという仮説である。この仮説が正しいとすれば、それは何を意味するのだろうか。

前述の通り、水のシンボリズム、そしておそらく嵐の神は、形成期中央高原のそれぞれの都市を統合する重要な原理の一つであり、人工的な「水の山」の建設、そしてそこで行われた水に関連した儀礼の数々は都市住民を物理的・観念的に結び付けていた。トラランカレカも例外ではなく、都市住民全体を対象とした建設活動・儀礼活動が行われていたと考えられる。ただし、トラランカレカが他の同時代の都市と異なるのは、類似した建設・儀礼活動が中規模でも行われていたことである。そして、都市全体での活動と中規模での活動が同時並行しており、規模の違いはあれ、おそらくこれらの活動の様々な構成要素が繰り返されたであろう。この繰り返された、身体を伴った経験を通して、共有されたアイデンティティが醸成され「想像の共同体」が作られていったと考えられる［Murakami 2014］。

5．おわりに

形成期中期（前650～500年）に人口の集住化が始まったトラランカレカは、形成期後期（前500～100年）に入り拡大の一途を辿った。これと軌を一にして、中規模の祭祀施設も造られたようである。そして形成期終末期（前100年～後250年）に都市はさらに拡大し、モニュメント建造物の建設も加速化した。少なくともこの時期には、都市住民全体を対象とした儀礼と多くの共通点を持つ儀礼が中位レベルの社会集団内でも行われていたと考えられる。そしてその儀礼は、世帯レベルで行われていたものとは性質を異にしていた［Carballo 2016; Plunket and Uruñuela 1998］。これらの要件を勘案すると、中位レベルでの社会統合を促すシステムと実践が、都市の拡大ならびに都市全体の社会統合を可能にした重要なメカニズムであったと考えられる［Arnauld et al. 2012;

Murakami 2014; Smith 2010］。内実は異なるが、北地区で建設された巨大な基壇も、中位レベルでの協同作業によるものだろう。このように、都市全体と世帯の間に位置する中位レベルの社会統合の規模や性質が、「中央メキシコの都市伝統」を始め各地域・時代の都市を理解する上で重要であると筆者らは考えている。

本速報では、中位レベルの社会統合の側面に焦点を当ててきたが、中位レベルは同時に競合の場でもある。紙面の都合で本稿では十分に論じることはできないが、筆者らは他稿で「火の山」としてのピラミッド建設と権力集団の生成について考察しているので、そちらも参照されたい［嘉幡他 2017; Murakami et al. 2017a, 2018b］。いずれにせよ、中位レベルでの社会関係は都市の形成・発展を理解する上で鍵となると考えられることから、今後は中位レベルの社会集団がいかにして形成され、都市に包摂されていったのか、その過程を詳細に明らかにしていきたい。

【謝辞】

「トララランカレカ考古学プロジェクト」は、嘉幡・村上を共同団長として、松下国際研究基金（平成 24 年）、米国ウェナー・グレン財団（Wenner-Gren Foundation; Gr. 8852; 2014-15 年）、米国立科学研究基金（National Science Foundation; BCS-1524214; 2015-2019 年）、テュレーン大学のラテンアメリカ研究センター（Stone Center for Latin American Studies; 2014-2018 年）、教養学部（School of Liberal Arts; 2014-2019 年）、ラーシー基金（Lurcy Grant; 2014-2018 年）、キャロル・ラヴィン・バーニック基金（Carol Lavin Bernick Faculty Grant; 2018 年）、人類学科からの助成（2014-2018 年；以上、研究代表者：村上達也）、さらに JSPS 科研費 24682005（平成 24-26 年度・若手研究（A））「古代メソアメリカにおける初期国家の形成プロセス：トララランカレカ考古学調査」（研究代表者：嘉幡茂）、JSPS 科研費 26101003（平成 26-30 年度・新学術領域研究）「古代アメリカの比較文明論」（研究代表者：青山和夫；分担研究者：嘉幡茂、福原弘識）、JSPS 科研費 19H01347（令和 1-4 年度・基盤研究（B））「古代メキシコの都市形成史：世界の知的体系化と物質化」（研究代表者：嘉幡茂）を基に実施されている。

参照文献

青山和夫、嘉幡茂、塚本憲一郎、市川彰、福原弘識、長谷川悦夫

2019　「メソアメリカの複雑社会の起源・形成・衰退に関する比較文明論研究」『古代アメリカ』22: 3－32。

Arnauld, M. Charlotte, Linda R. Manzanilla and Michael E. Smith, eds.

2012　*The Neighborhood as a Social and Spatial Unit in Mesoamerican Cities*. The University of Arizona Press, Tucson.

Carballo, David M.

2011　Advances in the Household Archaeology of Highland Mesoamerica. *Journal of Archaeological Research* 19: 133-189.

2016　*Urbanization and Religion in Ancient Central Mexico*. Oxford University Press, Oxford.

Drennan, Robert D.

1988　Household Location and Compact versus Dispersed Settlement in Prehispanic Mesoamerica. In *Household and Community in the Mesoamerican Past*, edited by Richard R. Wilk and Wendy Ashmore, pp. 273-293. University of New Mexico Press, Albuquerque.

García Cook, Angel

1981　The Historical Importance of Tlaxcala. In *Supplement to the Handbook of Middle American Indians, vol.1:*

Archaeology, edited by V. Bricker and J.A. Sabloff, pp. 244-276. University of Texas Press, Austin.

Inomata, Takeshi

2006 Plazas, Performers, and Spectators: Political Theaters of Classic Maya. *Current Anthropology* 47(5): 805-842.

嘉幡茂、フリエタ M.＝ロペス J.、荒木昂大、村上達也

2019 「水の神と火の神ー割って入った神の出現による社会の変化ー」『古代アメリカ』22: 33－44。

嘉幡茂、村上達也

2015 「古代メソアメリカ文明における古代国家の形成史復元：『トララランカレカ考古学プロジェクト』の目的と調査動向」 『古代文化』67(3): 99－109。

嘉幡茂、村上達也、フリエタ・マルガリータ＝ロペス・フアレス

2017 「自然景観を取り込んだ古代都市：トララランカレカ」 『古代文化』68(4): 75－83。

嘉幡茂、村上達也、フリエタ・M＝ロペス・J、ホセ・J・チャベス・V、福原弘識

2014 「メキシコ中央高原における初期国家形成の解明に向けて：トララランカレカ考古学プロジェクト」『古代アメリカ』17: 53－71。

Lesure, Richard G., ed.

2014 *Formative Lifeways in Central Tlaxcala, Vol. 1: Excavations, Ceramics, and Chronology*. The Cotsen Institute of Archaeology Press, University of California, Los Angeles.

Murakami, Tatsuya

2014 Social Identities, Power Relations, and Urban Transformations: Politics of Plaza Construction at Teotihuacan. In *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*, edited by Kenichiro Tsukamoto and Takeshi Inomata, pp. 34-49. University of Arizona Press, Tucson.

Murakami, Tatsuya and Shigeru Kabata, eds.

2019 *Informe técnico de la séptima temporada del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla*. Archive of Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata and Julieta Lopez, eds.

2017b *Informe técnico de la quinta temporada del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla*. Archive of Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

2018b *Informe técnico de la sexta temporada del Proyecto Arqueológico Tlalancaleca, Puebla*. Archive of Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata, Julieta M. López J., and José Juan Chávez V.

2017a The Development of an Early City in Central Mexico: The Tlalancaleca Archaeological Project. *Antiquity* 91: 455-473.

Murakami, Tatsuya, Shigeru Kabata, Julieta M. López J. and Paige Phillips

2018a A Multi-Method Approach to Reconstructing Occupational History and Activity Areas: A Case Study at the Formative Site of Tlalancaleca, Central Mexico. *Journal of Field Archaeology* 43(8): 634-654.

Plunket, Patricia and Gabriela Uruñuela

1998 Preclassic Household Patterns Preserved under Volcanic Ash at Tetimpa, Puebla, Mexico. *Latin American Antiquity* 9(4): 287-309.

2005 Recent Research in Puebla Prehistory. *Journal of Archaeological Research* 13: 89-127.

2006 Social and Cultural Consequences of a Late Holocene Eruption of Popocatépetl in Central Mexico. *Quaternary International* 151: 19-28.

2012 Where East Meets West: The Formative in Mexico's Central Highlands. *Journal of Archaeological Research* 20: 1-51.

Rattray, Evelyn C.

2001 *Teotihuacan: Ceramics, Chronology, and Cultural Trends*. Instituto Nacional de Antropología e Historia and University of Pittsburgh, Mexico City and Pittsburgh.

Sahagún, Bernardino de

1997a[1590] *Primeros Memoriales*. University of Oklahoma Press, Norman.

1997b[1590] *Primeros Memoriales, Part 2: Paleography of Nahuatl Text and English Translation*, translated by Thelma D. Sullivan. University of Oklahoma Press, Norman.

Sanders, William T. and David Webster

1988 The Mesoamerican Urban Tradition. *American Anthropologist* 90: 521-546.

Smith, Michael E.

2010 The Archaeological Study of Neighborhoods and Districts in Ancient Cities. *Journal of Anthropological Archaeology* 29: 137-154.

Tsukamoto, Kenichiro and Takeshi Inomata, eds.

2014 *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*. University of Arizona Press, Tucson.

原 稿 受 領 日　2019 年 8 月 14 日
原稿採択決定日　2019 年 10 月 15 日